風俗文選
說解
四

911.3
7
4

藏

風俗文選巻之六　　五老井許六選

箴類

飲食色欲箴　　許六

善ハ常也。悪ハ變なり。悪出て後善あらはる。故に善悪
に迷ハぬ人ハ、すぐに善悪より出ぬ人なり。今ハ孔子語
まで色ハ民と共にせしか。やさ紙ど今乃令を守らい
色乃あハれをしる功も、まづじんよりやがて大病を
生ぜり。色ハ三歳ともたハれずとも悪しおもへば、喜割
せしハ神ぞ。和哥ハ道乃本への頼りならば、恋をのぞき一
たまふ色ハ風雅也。風雅ハ仁なり。惻隠乃心あはれた舞乃

飲食色欲箴　　許六

聽箴　　許六

二女ニ嫁しめたるも。今日において同じ。是高き
なれバ。乃ち舜ハ紀を汲やうハ。紀ら誅せらしとなりけり
可し。舜ハ未だ両親に告ずして娶りけるをせバ。今
備ふる婦嫌と嫁まる事を道とやハいふらむ。継母に
也。陥る身を不孝の其一としるして。孝を云ふ倫の祖は
せざりし。若周公。孔子。天性精の聖人なり
子あらず。其一乃孝道を欠ぬべし。是とて聖人の
まれならバ。子あるべきか。桀紂が極悪も。子ある紀ハ是孝
なれば。子ある紀悉くに孝とやいはんや。
舜禹ハいづれも乃ち御附くわり。西域の教もと広めたまひ。教ハ
極めて紀を貴一とせで。又親の紀を知る者世にまし。

た婚をとり。人もすが二両乃紀也。神の道に合し
これをあ鄙とし。又乃枝葉末の機をしるらバ。行
近き乃分量をよくさとせバ。此乃せまく人のるとも弁
國也。彼やうの人く。ぽ知れを不孝とし。気乃子紀
者になりらバ。從く留むるも。ぼち入り紀。湖も浅
像が紀を切わく。仏法に及ぶも。業障に合紹ぐこと
さらバ。法師にも僧にてもと。身をきよく言ふとも貴く
我まひくまれて他の不へとも往くも。多の春の会ハ
るふし。仏んなれバ。いと先でよし。儒法とも入るときハ。備へ
子たるべからず。節で唐にも是乃本建立の源あら
むつ。山浮さ紀が一つなれバ。子孫あふせずと本ち

しあらひし。一人の飛入とかはりの者に所心てうあわさるゝ
表うハあ給ふ。此頃ハ僧のからくしぶといつる之れあ給ハ
かくことじ侍る。
「盃は。けをほめる給ふ茶蓋切ハかしこ之る盛をとゝら給ふ
菜は茶ハ器一盃を菜ようまいらる給ふとも其の器を
持て。飲食医物たゞふずぐれさる格子の物ハ賓客の
もてなしとせるに。甚だくてもんハ亭主を奔走せる
あり人申だこハ。座しく物徒閑談とせるハ何ぞや。
「饗応ハ必ず此物。酒ハ給ふ此物。菜は滞し出物
主ら公ハ酒をおすれ。酒盛を饗応をくれ。是天乃
自然ハおのづから上戸下戸器量まにまかせて

がれ角をとつておまえる類とやいそぐし。
「傾城の色ハ晋子が天保ていふかゝしまい給ふとも。遊君
の情ハ下界よりおりきたりハあ給ふれ。本尊ハ女の
上に仕置せり。れ拙女のきねかしうらうつり香ハたねり
袋乃匂ひにしもおも侍。やを傾城の匂ひハ麝酒
のり川つきつ香たらん。退込は君乃そくいさくけ仮ハ
動かて定くまうか候。
「悪あの喜白くこうやましかくれまのハあとし
まけ給ふ右筆さいを給ふも。第一書状も。祖母ハいを
あぶ給ふつるこうらうそて多給ふ。色欲よおゐ給ひておく
まで恨するとおもて。男女は上下乃そむけハあぢかく

ちかごろ四条の人の書ハ。七人ともにあてがひといへるかな
子の縁とおぼしめさるゝは七人がすへ人といふ代にあれ大。
やゝいはふまじけれバ。ばとかくざゞりをさらゝし、やる書
ようおぼす川のおもき也。

雪(セキ)駄(ダ)の鼻緒。鼻紙の御書をとさゞえて。いくらは書
をきも侍るハ。下女やなにも若衆上乃舞(ヌイ)をむかへさせ
縫(ヌヒ)乃奈おおともして。おこなハさざるハ。かならず
かねてそ。おほむねなる仕合かきんか。れ深楽乃
世とまりもの。神道乃おところさまる神いとれ
よやいふべき也。

鰤(コノシロ)鯆(オウ)河豚(フグ)魚とは、魚(シウ)おあり。秋も本にたるまれ
つなぎぶあくまで肉をくらひながら汁をのみてこれを手拭にて拭
まるゝうべきなる類なり。

鯛ハ魚乃最上とほめる也なし。鰶(ハチ)魚まで鮪(ワ)しもまる
たとへしもあわせとにおし。

鱚といふハ物で。魚類の下子またいるまで飯て。いやしきにあ
そへ物となるにもしならむ。因幡乃鯉(コヒ)しと申ちらぞ祝品を
多く紙にうつしとも。正月乃こふまきおさめて。上臈のま
へ出しまいるを。自慢なるわざなれども、かしらを切らぬを
さけ。獄門乃ごくまかもて。口にはさむ神祭の弟魚
まゝくつてし。鮒はとまらで切くちもくしはなし。

かみしもといふ魚ハ。おさまる御ものとも。ぐゝふべきのまにまれ

猫がしらのことははふるき梅わかく。老屋のてふ〳〵はなし
ばうけてかる。惟然坊がつぶやいくらなる句がたもみえし
一 烏骨鳥の匂ひをかそへきれぬにぞ。むしろ喰まゐらするもの也
よめへおりけるらん。
一 橘こそ。花ちる香の樹をおもし。雉子になきあけて匂ひをとよめる
瘦て小丘へといふべきとも。雪に雉のいきわかれ所の
席とはこゝろまる。
一 生海鼠といふともよし匂ひぞ。あまかふ風まき物なし。早苗の香
よかよひておかしく。松茸のめんしたる物にて海苔
みむしのゝ類ひ。
一 蟋蟀の聲しきりは。潮掛の物の奥に入ることかゆかし。いくさ
やよの匂ひ風流にはあらき神どしも花匂ひとやいふらむ
一 ある法師の落子の野にかるを涙発しけるまでは。侍の遊人鴨の
落子かけまゝ又よしと恵しける。
一 附を感ずると去るは。ぶけ葉より大豆汁のあかやける有らぬ
つまり菜を庵がらしおもき句ぞ今は。秘密の有る説をまくなり。
一 行路の点りを。去の系路と枝尿を幻えなり。宗家のへいぞ
の花よ梅をこよみすいとよし。
一 錦は。節振舞をかずてとし。錆を生身色を絶よと秘す。
一 さんちやくの附。此安ぞ。八川をと感擊の望といふべし。吾若き
と義乃道を志して、立つる詞なりし。
色をおりにまし。うらんゆえるがでく。

義をしるときハ。慶びしの辛き類せしと。
山葵。生姜。蓼。からし。山椒の辛き類も。辛くは蒲焼
をしらず。海鰻鱺といへるものハ。まさびの辛あらわするかくそ
とすれ此の昆布のにまで過ぎて同じ。山椒ともに手料をくんせられ。鯉の
みつけの清まゝよ。鍼鮹のおぼ川か?味噌汁とし酒。
色をなほしのまうしなしぬを命とかよえつて。おいしきをかこち。夜
夜の手をさらみ。胃がつ痛よ。その情を直せつて。湯豆腐
をのせつくしきちきわよ。百と世のよろひをおべさる器しく。
さる敷居をつくりて出よるもそうしぜせつしよ手を。花の跡の神を
以てとも。飯小野の茶屋まわり旅路同じ。手廻しなるべし。
頭書をお花見。階子よ上つて。おそを迷ふるより進退よ?の手
をこしくせば。四つの鼻の亙に入く。二階口へ跳子飛さし出し
私宵あすまふなしへ〳〵日。二寸三駄の手とるを持ちそ。座敷引廻しするの
つまをくらひさる。精や献盃の猪口まつくべさる心地やせむ。
むる。山芋ハ。腎の薬とぞ々ておぼえて同じく物なしバおかき
ゑん物よきくハたりしよて。飽食すれば。虚実ともに病となり
て。魁をそるふをちらず。たゞ人なれバよく病を致し。生涯を縮む。
口味ちるるやハ。餅のごとくせよといへ〳〵は。五味ハかぎりありて。情欲
をかぎりもなし。色をむびのもしらみぶりまに溺せば。傾城に家をも失ひ
まことなくあまたど。賢愚をしらる人ぞ味きらいばこ。

聽蔵

許六

○耳ハきく事の役者にして。聖人耳に五聲をきくといへり
大きなる世の理也。されバ山林深谷よりかくれたる悪聲を聞
ずといへバさしかはるべし。されバ徇佞も通ぜねバ鄭聲をよしとい
淫通を元とし未母の胎内より聲にして此世の善聲をきく
とかや。本来舌の結ぼほれあらねど。そのかゝる給ハ深く聲を
喧く聽るゝを終えて。神鳴ほとゝぎす深乃きゝぐるしからざるなき
神の声をして中乃治法に耕バさもあらんか。首よりわけ此聲を
なくし惱よりあやうくきく人なし。當世ちぐ九鳴鴨乃きくハ。此
聲を乃もたらなきととなきてきく事なけバ。世乃姫たけ此聲あり

せるもおほけなし。和漢詩哥の相違あれど千声万籟。
音を鳴らしむる事。はよりハ姚ものまで此世の声にハなき物
事をいひてそ。其のねうらみをよむて。つまるおそれひとけなる。
和歌風流の手枝にして。無声よりからぬる此きこえハ多し。
参をきゝむとゝむハ。禁乃字の心なるべし。此音を嗅附ハ邪全
をも禁ずるの世。むしろ人のきゝなきをたえずして籟物
にも難くへ。瀧を詠むるにもこころ発くおずして一目の耳がる
事ハ一にして。きく事ハ九川なるべし。須臾乃間も耳ハ中より地の
喜聲の。客とあらざるなし。ほまれハ人の聲よりも喧聲
そきえなるべし。そうかもうへくらんと。と耳をききくまゝ。情
をかんとひらけおほせ乱む。しかも尻ね虫にくてぬ紀。

世にをちかふことは。傾城乃誠はあさくしておもしろからぬものなり。
それよりもこゝろを音に揃ふそのよしなき術。蕃華ひはおもしの
音よむときめ楽器の節おもしろくべし。手を採らせのめでたく
拝まれつるよりもはやくをまなぶ琴。隣家に聞ゆは毛描独
乃胡酒を三留て車弁のそらにあるき。人を求むるなりてゆらく。
康しく手にて稀にいたる。和哥もよむなる也。小哥。浄瑠璃。三味線。
尺八。胡弓。やうやくて。君子は中にも能きる也。曲をきく時は。何乃
あてどもなくて。不用邪慝乃おもしろさを覚え。鉦鐃鈸の音に。
人の心よろしからず教とおぼしきことおもひ。かつ琴も琴瑟五也。
琴ことを覚えて守りて。其一によくまなびて。聖人の楽を以て
天下を治めたまふ。天地の楽もこの国に。史楽は。天地を和らぐ。

神鬼をうごかし。世を治め。術を学ぶ人。風をかへさせとはいふなり
なれば。是を民乃邪を禁ずるの源也。これは。雅を譲って
さしてはことにもおもしろからん。嫖は暗に至れるひとなし
鐃。鐃鈸。自然に死乃道ですみを樂しむに。是人心の和らぐる
しも也。何ぞ聖人楽を以て世を治るに治りきらんや。王昭君が
琵琶は義なる絃をかけし。人終にほまるる者多し。ふ。琵琶真
王昭君が琵琶。客を動かさる心あらし也。五音情をうつしき附る
書物にあつし。が。聖人耳に悪声をきかずといへり。若
禮によらず術をきく事なかれといふも。此あさまし乃是
しく大なる事なるべし

鉛

机ノ銘

芭蕉

間ある時は肘をかけて嗒焉吹嘘の氣をやしなふ時は靜なる時は書を繙いて聖意賢才の精神をさぐり靜なるは筆を執て懐素が方寸に入ぞくみなれおしこれは一物に三用をそなへぐるさ八寸面二尺両脚にあめつちのあたり乃卦を彫りて潜龍牝馬の貞に習ふことをあらはす一机と名づけやまさに二用とせむや

五老井 許子 選

机銘　芭蕉
東銘　支考
西銘　許六
茶碗銘　嵐雪
雲華園銘　汶村
飯鮓銘　吾仲
座右銘　芭蕉
是非斎銘　許六

東ノ銘

雙白堂主野紹夫妻加其好風雅因有双白之号東銘指野紹西銘西其妻

文考

○女人の徳を出て先ツ不丹青ハ浮おやなりとて一向の一字もよまれ
よまれざる事ハ餘律をまぢへり。頭に金冠をいたゞいて君といはれ
ひ男といひ。女といはざる人の見て名づきたる名なるべしと
寿をうえへしら。隣勝世の家のもれがもあるに男乃をよけへしき
いづこ乃世の秋よりあらん。それで此双白堂もあるしならバ彼乃
商山の翁に頭をならべて。ともおもしろき風月も面白かるべき
其銘にいはく。

賛
白髪ハさとき徳なれ共にかたらふ縁なき

西ノ銘

許六

○深くつよかるね女ハ風雅なる。京師乃どく。世上大和の浪を
ごときハ狂客の恐しきをそへても何ぞしが細腰よりそなはるる緑を
ひをえ世さら。天ハ香来山乃衣をそそ布引ハ桃花をそそぐ
ほそきも笑をほそみしろからる女の手まさなるらん柳も日本の
つむぎが拙者のまことにいひなり。流乃もとゝハ年をそらなし
つりて花と来りしなれバ。其節なしよへ共に双白堂ハうつ
なほべし。其銘にいはく。

賛
の女流男流乃かざりに

茶碗銘

凱言

○名茶碗あるものゝおもかげをしのびてありけるに悪をこゝろにかけて
し月待宵のやゝをさめて闇夜に更をとらへし〔し〕ハさらに
つらなれるまゝのかぎりはあらざるべし。

撿挍　貪瀞　大黒　小豆

もちの　よるよ　小千鳥

三代目をみんなとしての世ことに柱におなじきまゝの茶碗
くるりぬ。

かくれしものゝ名と云ハよく陶器茶碗

雲華園銘

五老井四編
丁章也

汶村

○雲茶ハ龍鳳を貴としたるハ婦由孫の句也。和漢飲会の中にも雪
味也。陸羽が茶経に於ける事。建州洪州に名茶多し。て杜牧も
之詩を作られ。和歌曾恵としては唐巴蜀の實をこそくめ
て継るの香に植しの小柳乃尾に楯されて。物茶の花に使はる
るとて。続に宇治山に摘りて上林何某の家をかへらし近
の大ましき。駿河の安部この茎茶。誠近江のに山に茶あ
茶補をされ政所。松尾ハ稀なる茶也。さらに宇治田原ハまた茶也
雲山と申し唐茶の偏奠を製を世に行く陰茶を
謂ふ。其の見世茶の茶也を挑むれ名おもての茶籠を総て稀也

のか情まで取れ生る。下林頸(ざうりう)よすへく。まはしくやらし。まことに其諸[illegible]
能さまり快　能まりのは
く悟(サイ)は　く寂(カン)多
能まさむ　能屈ると
六の徳を兼るといふ事なり。茶あつさくおなくれはあけく茶なるは
釜たし。韻焙(ハイ)金砂乃二泉は茶を烹るよしあし。二乃間の炉
柳乃おあつとしいふとも。錬子が花井を汲で、此茶をまゐらせ
て白雲滿(ミ)碗(ワン)花排徊と。一きはしき稚をすゝめんは巧拙(セウ)雅のこ
をすゝむ。盧仝(ロドウ)が七椀(ワン)としいふ事を[illegible]

飯鮓銘

吾仲

○飯鮓(いひずし)は、いづれの時よりおこれるにや。しらず。此ごろ来たり。様々にこそ見
ゆれ。今はおかや木乃すしよかれと飯はじ下さは乃人は月を限
りても味べしやして、すのなお候あたは、ましくまさる[illegible]
かれん小歳のおはなく咲はよき稚をあらせそれ[illegible]いかなるの
深おんの待るとらむ。是まで二季草(フタキ)おち名も世の人のぞし[illegible]
此松乃香すれば、またる折(ヲリ)よくけなをかさしかも又は[illegible]
其ても世るへし。かくしるし、おもかまてすんでよき夜の[illegible]
あみ能き世の長(ナガラ)く飯は。むりしを志のぶわ梅津かつれ名ま
たる種なく。大は松乃旅人も笠をさしまれとしつる[illegible]

かの茄子はたのみの斧を以て何のあやまちもなくしてあや
咲ける花のよそほひ雅なるらん。是も旅の身でこそ袖ぬれば人の
あはれをもたのむべし。是を若れ精と以ふところなく添て。旅
ねごとしあらん人のおもひかるを。絞ごとしえるをいの笑たへきゆへに
ごし其謡了いたく。

以飯為鮓　鮓何非飯　一點鱧皮　十重鳥子
色於雪白　香非梅酸　藤花漸暗　橘香已近
貴分充囊　下繭未知　昔于和玉　似之是賜

座右銘

○人の短をいふ事なかれ
己が長所をとく事なかれ

銘云

物いへば
唇寒し
あきの風

芭蕉

是非斉し

○是を是とするもの譏つらし。

非を非とするもの譏るに近し。

叙古来日。儒釈道乃書をよむ時は道を儒乃教となる也。儒

佛のむかふ所をするとも得る。若般若乃三翁せよ無まじく。

吾その心乃在を混攪せば。先て是非辞の糸を歌ひて

蓄翁の連歌に入らむとならの言よりおきまな。

許六

嵐蘭誄　芭蕉
丈艸誄　去來
去來誄　許六

○誄類　五老井　許六撰

嵐蘭誄　芭蕉

金革を褥として、あへて死するも厭ハ士乃志也。文質偏ならざる
をもて君子のいさおしとハ、松倉嵐蘭ハ義を胃にして實を
踏まし、老荘を魂にかけて風雅を肺肝乃間にあそばしむ。
ちかひ十とせあまり九とせや、よくしる友を睦しく。
岩洞に先哭の跡を志たふといへとも、老母を養ふハ稚子を
はごくみして、へつらふ世波にたへず。されども業房乃あるにを
ど閑と風雲に座して、今年仲の秋中乃二日、雲井金澤乃
波乃穂に月をみるとて、鎌倉に杖を曳て、へつらはず、心地悩
まかりして旅に息絶ぬ。おもひさき亦七日の夜孫子にぬべくも

乃母よ先だち七歳乃稚よりおもひをおもひ、いとゞおもひしむ
難ひ乃。廿年まで にきこゆるあつさのころには。暖をしきらく住ふ
きう川ハりあ、しるへ松風に吹れある筆の枝いにしへ
秀きくらにそしくもあるべし。今ハ乃自の心さへ志ら紙て然かる
老母乃根。ころ吹ちるけき。志てしまかずかハ園花へて偏し
親族乃別よひとし。きつる朧月をのわぶ。稚子がくまほつゆ
草か草庵よ来られ。かまよ書れさんべきよし我ら三歳乃筆の跡
さしあつりしど。成乃一字を摘て。成式と名づくべし給ふる事
今月乃あいわをさらべば、ますます河むかしを思ひしたなくて
人乃と去のいれるおるかして文乃ばよくゐおもてく見のかくあて乃
かく、まさいひそ他にひつひそさる情乃。愁への涙よひんでかく

枕もうちわきまへからぬ世筆をうちつけなりひとのういひともむかし
才能になくば、いかむとす他が胸なづみてちぶおしもおもう
かくありて。夕乃かみにむすふのこゝ。
秋風よ折くだれし寺桑乃枝

丈艸誄　去来

○今茲（コトシ）二月（キサラギ）末乃四日。丈艸子草庵よ終る由を告て。禄如の高まゐる
まひそれと。湖南の正秀が許より志らせ紙乃かるまゝ。悼むさむる
涙をふりはらひねばくぐしさ人乃むかし我らよか屍絶のすへさ書
大山よりかへく。勇猛の名をもあらはしとぞ。一旦不意一人を他
しのびそたに君父乃ちをそのいわ。名乃僧ふ髪おろしきらぬ。若孫

にひかへつる句なるが其の趣向には指の痛ありて月の物狂
べしともあらず徘かく活路にかなはると也。ある人のいへるは文
に家伝鑑を作らんとしてかゝへ人をも志ありて病にかゝりて
まゝにかくしおもむき俳諧の史部にかきかへ共西行に俳諧し
芭蕉にまみえて神の加護をかうむり二畳の数寄屋の内にこもりて至へ
世間の大隠のやうに面をさしむけて吟をなけく此人をかくれ
芭蕉の言に此俳諧はすゝみて人のやうにもあらず月を
詠へりともみなさまへず。それよりこのかたりきそうやう
へし。花をども性をしみ世をすてるをねがはん盛ありて冷し
人ありて詠し。世を此事すみ月に住しうるがなし。芭蕉集
門に海をまよふ此俳此集の句ども。世あつまいてせまるらしく

其角幽僻の如く露におもむく月などゆへる句どもの上に人ほかしより
風雅をおもうて上達をもとむると称し。此俳かゝりしといふを家にへ
の作へまつる。又新潮に病床側にありてもまた加らの叙句をと
先。よりも句が死後の句なるべし。一字をかへ族と加へしを
とはりひかれて武を唱叙して辞を指むしおもふの素地に是
もあらずよを述ある人志る神で次の方に移るとだしかるを
老能に志を程。又さ病人が悩を療やとびりわしれにかきら
を画しなるが是悔しても管窺に見やるでそらしげくの俗を
きられとひつる一句ありぞ。其字出来ざるとは盛にしまひある。
實にかくるおもふがくる誠とすらに先真を探て俗情彼の
いふ田家ありしとは其時によるせで和作の名称は翁遷化の後

ぞ膝下松なる旅の枕。さらでもみる門あて。嵯峨の奉行なるの望
草庵をむすびられバ、時々門月鶴曲々水相逢ぶくゆゝし
あり、彼幻住庵へ、落柿舎を柳く。飛ぶしの旅へ。翁猿
と云聲のさ旅。吾も彼山に遠のぼりて、卿木芭蕉湖水桔
頭花洛山と眺望を共にし、作る人々山をわかくさる峯
ひあへて吾八世よるで、ふの役あわく久しき旅の弟
卯る庵も志しかるも途まの神に望月。一夜なる明をゆる
草庵にやどりて、さしむ夜や。おもいはくまへ山の上と
たておよびの道法みな後ばしを忘まかるとにて我ぞ
鉢なるぞ実りまして雷鳴地に響ぶ。大内奈を
ちかれば、處宅欲剣且之寛満也。雷為之震

し出旅笈に、ひとつ旅ね男乃上洛帰りしまで
きつし。寛永宇もかさびわめぐわ。今ひろしよ
糸のをおてる風十年あまりの筈。三年あらみ
作しる根元石年乃みをはれとしゝも
名おきしれバ一句誠に向く。おしきり去状以て
ける也とぞ。

去来誄

なまさりの名さるやこをおもしかる

許六

○維宝永元甲申のとし秋九月二洛柿舎の去来卒去。嗚呼悲し
ひかれば、向井氏去勝老人の末なりまた統をしの方よ

おひたち。名を雲竹と呼ぶ。此法師かつて俳諧を
ゆるして十哲の中にかぞへらる。十余人の門人をおほく
年来の友たり隠士。和名これを流へいふ也まづ川へ行ハ。先
師芭蕉翁にまみえて風雅の魚をとられ京師にかまへて。洛東
かしらに坐して南西の氣を押へ。東山の風を譲りて。天下蕉門の
高士と称じてあら世の時。正風体おもれことを知らまで

湖の水まさりて五月雨とや。其葉の道を営まて和歌
流行の巷を見ながら。俳諧の新風にまとひても終に書文の細きを
うれまでと

春がしの花にも落さぬ哉の外
ほとゝぎす須磨の浦にや文を在所十文字とへもまうしくいふを

仲冬しや

宮城のれや古てふもいひとかし俳諧の集を吟じて芭蕉の耳を驚かす。
同書撰乃才一。古今能秀逸と大きに手柄とせり。すぐに一代秀逸を
一両句まで諸人こそ称すべし。此おのこハ已に数句に及べり。二
条家の新れ乃功積へ。洛陽の蕉門今の時まで遊べ。右此の和漢家
老を論ずれバ深くて。一とせ難波の変を聞て速にまうでしもの
解。義仲寺の葬儀にも病床に翁の辞世を携へ。其後は誠に深く
守る法度をなしつゝ。神んを見えて。終乃浪化にかゝりて。其後
浪の書を選じ。時乃前七を見たまへ。浪をもを集む。此秋の
大の教へに力をよせて。文選広着の一人にたくみ。病床に伏ても。二十
自他の書を寄せるゝ。何かある蕉門の滅亡の月日をや知らまし。

去年の冬ハ中嶋の隠宅に遊しもわすれとし夜宴文会。大竹氏も
秋九月比三郎去て。その人も見えず今ハさそひなく人の情も
世をさるものぞ。常(?)にきりおつかへる士大夫の中にも世のならひとて
なかなかにおもあるべし。其人かの人へと心をくだきしも今はきのふの
従来の固陋ふける事。あゝ今も同じく病疾乃ようにぞ
うきてたよりとも絶て。今は余閑清寂のこゝろに遊び給ふ
老先(?)渋宇下の春景をまのあたりにして其かんむりをかしこまり
翁もいとゞしき事あら時々揮毫の一筆を寄せ候。文会をはじめ
来客と対しての心気風を楽しみ。二三人乃集会を楽しむ(?)
と花陰の細流を見ながら風月の詠は情をもよふし
て詩作もさびしき業なれど。それにつけても人乃其心を知る。

時に小生此節仕事(?)て我も皆是(?)森の下に籠もりて
かりし小袖ははらんともかれのしるゝあらねさぎの
と書きしもそれ。秋のあはれなる露の葉も虫なく夜毎に秋もやゝ
とおもひ夜の月も涼しく物かなし。何となく心わびしきに。心おもひ
きりなくて。楽しみなき事とも。夕陽(?)まちわびて
ようとおもひ入湯あそびぬ。みどり〳〵の稲穂ハ黄金色。是ぞめでたきものなく
あぢしらふひとふるハ。天然(?)秋の景色の旗(?)の[illegible]谷のつらも
もよしや。ようやあやしき。其の酒宴ハせそ。こよなく楽しき事ある甲斐
ありけりとて。川風をうけ酒をくみて。田舎ちなみの紀念に
ぎんかく(?)のしらべも有明に。今日のしらべ。うちよりて
断(?)りの次第是より申さば。金引(?)参らせ申しそうろう。心だに勿論。

はほど世及目のとどろくに痛しとえるかぞへ思ひしかもおはしや
ふ。露の命も死ぬべき時くぐりつきける事どもに心ある小袖お備
りゆうも。此まうじも秋いきかける事て。勝ちくづまじり手折り
親が小袖も申うし実くぞ思ふさもくもみ御しわらひもうし
らむなど。姿をゆかしくふびんなくて。南禅寺の豆腐屋も涙を
おとし。白河の合せ絶もなく鶴を皆とははふいこち離りさまで嵯峨
丸が川に泳水まじりて落ち嵐越えば、此年中ねむるのは家よいと見つくる
今への時代人心ならぬ中さへ恩の哀視の境も有して死に嫁娘の生
き親を子より母の行末いかに覚束なく思ひ果つらん。アヽ悲哉松本伝の傳が
身まうわびる時代は秋の蘇せも萩べし。いかにも哀れなる事なし今方誹を
推て彼を痛むべし源氏物語の哀きもおもしろき事もいとあはれなる人の。しかこれ悲哉也。

落柿先生挽歌

郢歌 五首

支考

五老井 許六 撰

○歌類

落柿先生挽歌

此歌四章而後加變声之歌三章漢無此法蓋和文一體歟

支考

○ことしハいかなる年なれバかくあらぬ人をのミ見るらん去年来
神無月にて浪花の君よりの使くだる宗乃光ハ石をともし重陽に求
明にて此きさらぎ乃形ハよみちて彼の法に佛はすんぬ明暮のし
然ハ誉乃精舎に白紙となし。そなた彼守残を含て見よわが梵
身のうへをや。翁も帰らびとぞくれみゆえしが去来来らぬ人
乃教よ入かくいふ翁ぞかれおつとみるらん沖乃秋の夜を更
よ老の波みちよるらん花人も花ぞせらるる花人のはれがかなる世也

きこゆれども しらず人のあげく神しもがくおもむくをきかするべし

人ハ故郷をはなれ三拝も過ぎぬるまでを 終の後の心持も 心ある人とも

やうやうかたちも 未だ老人のさびしさもなく 世をのがれたる人のよ

おもひのほかの遊しさまに 何もなく もちもさびしからず

とも世の交をかさねて その人かちかさなれば 身の心おもむく也

しかるをなんでいふもとぬるも 此の人の心にかなはむ人すかなく

されば世ハ移りける光陰のかげのごとし 先てあきらむる也 誠よさびしき人よ

風雅ハ其の後のわ身のまゝなりけり みおもひて芭蕉も此の世をいとひ

しかるに三年をしのび 家をやかしぼくらの身よりかくれみおもはんとして 古人の

なきのちも袖ぬらしてまして慕ひの言葉として 吾門弟子のもとなる

書や何もかも人をなげき たぐひなくして 心ある人のおもかげ

家をも離れ庵のあるじとなりて　寂しき秋の夜に

名ハ蓮翁か指に釣する

世にふるもいかならん

空しぐれ秋の心を恨む

さびしさもかくなりなん

窓におもてしぐれ鐘をきく

秋の夜のこゝろ 秋をしのぶ

たゞむべし 又かなしむべし 又

柿の木もあき袖の様に語りてはさびしさとなりて人を秋くる

嵐の山のあらし 世にのがれし心を悲しむ 世を捨つるの人のさ

びしさや

○ 鄙歌

あふみおもて　　　　　美人草を

雪 ねぎらちさらぎはみなれ／＼ちらちらと二十の新さ恨む雪

自得　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　くさば

夢 つくらちのまたきるをおもひ出すおもへどかれ／＼かるをまを

野らび　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　おいらく

朝 をとこ雛僕を挑みそらわかて貴人をかけよ人よわもおもの神妙也

二人のまえ案ほどよかる　　　　　　　　　　　　　　玄木

かなしかくいまかしやうて二階からおちて乃様ちぱかるなかみまり

ながすいよゆるしく　　　　　　　　　　　　　　　　許六

白 鳥のさらいの神にも光やそれのわかくつく 螢の也まま

俳諧發願文　浪化
剃髪文　支考
弔古戦場文　芭蕉
斷絃文　許六
聖靈祭文　李由
祭猫文　支考

俳諧發願文

浪化

○人程よく六道に生きがしき因縁にむすぼれて娑婆の業因にまよふ
まことや世に高見する人をはなれて八宗しらずして天台の縦目大
汗みぞし蕉乃さ説小松杷の葉つまでうる耳のおもひをたてし。
函麟をもちて鑿打に走つきれなまつかりし先てへとめもる
しかるべしもよりかみすわ雑にも山方水のおもひをこめむ程く
気づまりなるんし。若菜むせむと思へば箱根乃松を心に江く
ながしそ清見寺の梅ほつるがそんかのびやかなる風情をおもひ
されど一時乃業なりも重く、まわ枝ころひとなりて安堵をはじめ
不極一日の業とはとりて程なくこぼれ、節乃石碓きこゆやなゲて

ねき様果ハ桐と立ならび侍るにそ神さへあるべき甚う明人ハ春月り
いつきに陰陽時をさへ定め紙夜間じ事なりけらん人ハ能わざき侍らん
よろしきあはせよとして一花折こそ更に業にも神代基磐石のかぎり
本地垂迹時何乃を気もなく未届しけるハさりとハ誠多きものや
べしさしもよ日入て無じらんハ世先て前十日もながれ給ふべし
さいハ死なられん時ハかならずきさらぎの沢辺に生れてや文母にかかるに大
小立すじりて陀羅尼たか川の下衣にかけれ。あまされ何じ
まゐらせんもヘ文あり神なるべし。若一枝さして法佛にまゐらせて一肉
○枝々ハあらぶる嵐へゆらん人ハ。さりがたく西方に生まるべく石蓮
おの饒舌にハなしら茶薦麦切ハくハしえけるべし。今五百らんの緒
経ハ根五萬の数の水をおさし。百数を申さむ数と合さくて
其乃廻向をおくさましとて仕舞侍るなり

聖霊祭文

李由

○そもそも蘭盆の事ハ天竺にも五穀を供ね不なく。寡婦が紡
績乃綾絹ハ日すたれて貧窮に返ぬ神々く。餓口交り
閑る事かさしいろ神ハ極楽浄土の蓮台を云百味乃飯食を
きよらに盂蘭盆よみ神ハすかしてわあくへ凡の蜉蝣の迹を納る
麻幹の杖つきて戸板ある五色の庭茶つ瓜茄子和布の荒鹿
辞か。こら麦冷素麺の桜井あひて。只久来る神浄土にお
まみて飽て。婆娑乃かるこそよろこび侍る。雪の果もあるらし
地獄乃釜のふたも明くらん。たまさかに仕合なり

今ねこの振舞までハ。おのしき奢の功流にあかるべし。されバ惣て
壽命生れてあらぬ神其中有の流人ハ、が死とえらバおもひしまふ事ふ
叙ひ是心までくる作善功徳読経念仏のわりにてと何ならハ、海
諸の仏果をえらしまくる處くも。餓鬼あしらひはおもふ神げるも
新羅呆ハ暮乾拾乃ましさて神くバ外側にあるまじあいの神
なるべし神。生業んで別称の者がバ、おとまりぬもみく勝ぎもえても
神くるに両の足跡よ人数を志る神経に送るの勝よぎまりし
出さ神て葬祭乃法に伺ても惣理能書の評判せんハ、れ
人界より系ハ損のなは生なるべし。伏惟中元の佳節浮屠の
教よおほき神目連乃母を投し苦乃海へ文を流めしあハ神
たぜ教説乃衆生を徳し亦論親属の名を浮出し亦ら

一まびの此施主ハ数よハ入席し。一念不乱に寺の小從ヶ所
よくハつし。一倉を投てりしるよるに親の神あバお勝へ奠
おしもなし。界ハ草苔がを寸年となりぬ、報恩殊よ。よ也の形
さ度程呆れ来去の月あらく。上古今年の善ともハ盛ある
し述川乃此の脊界よわ。世向一統子共合せくがさ流
かくうわされバてつき席所ぞ悟主の来まとハうのよきさき来
遊し。今年ハ孫よ穐づるもよし。地獄極楽れ七鬼生。あき自
細のいきるまで。さそひ合きて浮かあるべし。六ハ月花勝の航たる
まし事ぞ。一縁乃祭文を作光を奉らんと仍護此新
聖霊よ座テ一あるらび畢そと尊

剃髪文

支考

○浪花乃舎羅雑俳髪のおも舎羅と呼ばれしそれの後も舎羅とよふ。此舎羅を捨てゝとゝ舎羅が弟子となりて、舎羅がおもひ、素龍し
かゝる文は舎羅なし。

一 まびきて瓢乃花のあさまかな

祭猫文 小序

同

此文ハ以四六之法ヲ用漢字韻ヲ也是全ク似ニ誹諧之漢和ニ而不然始テ以万葉手ノ尓波文字ヲ用之為韻惟為和文ニ用ル韻ヲ之始ノ祖ハ太タ奇也

○去世が素庵はひとりの猫児ありて、ゆりをゆりかへしといふ。
まづ人の子飼ひけるが如くなりて、ことし去月かの日とりかへし
夜の床にもまとひ入て、身をはなれぬ。庵を庵にかへりて
く秋の自園ともいはれける。彼とまりぬるに人をさけて
猫とならぬ。さればまひ乳母が罪をまぬかれて、妻戀の
乃人果てしといふべきなれ。其文曰
秋の蝶の森にまよひて。鳥が啼時に啼き。
猫の茶の實にかくれも。馬蹄が原に一夜の寢ぬ。
そのまゝ錦繍にて、千金の娘かとおもひしに。
まよふ八重葎の一重さくとも紐解る。

さ汁ぎをし　栃本清門乃書。

虚堂和尚の詩。

来よ八千よ　桐千よあらそ待て。様分乃胎なる樽。

貧よ是守ず。　傍ふに西せうひく。枕大お出る時。

嵐ハ可捕とはらめて。塵ゑ去し杜工部。

性を無用といふめく。呆見を白蔵司。

黄ハ廿二の宮の中。　牡丹義あり花さきにほやく

今を来西が庵也。　天蓼垣にあ待つ實をそ小松し。

おまへ作が添枕よちゐもてゝ。　さらに頑城の月仏案。

浮世をかへらし高樂あそび。　ともに菩薩代地教古。

主入家の多も草むし

蓮の基はいゝ淡も障らし

涅槃の誰乃声所あく。　園伽妻お眠をちるたもなおどろき

菩提ハ月の乳情て。　卒都婆の心をたてゝうるむ

竹是之　高生

南岳　河夢

弔古戦場文　芭蕉

○三代乃栄耀一睡乃中にして。大門の跡ハ一里こなたにあり。秀衡が跡ハ田野となりて。金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれバ北上川ハ南部よりながるゝ大河なり。衣川ハ

泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入。康衡が旧跡ハ衣が関を隔て南部口をさしかためて夷をふせぐとみえたり。さても義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる。国破れて山河あり。城春にして草青みたりと笠うち敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

断絃文

許六

さるの響くと嘆じ来る人ともひろきものゝ鶯あとをとゞむるかなしさ。是也。今やよまへらしむるぞ。子を捨妻をすてゝ山林にかくるまで、とて琴と鈴金を擲てまさにそれて好みし琴も絃を断し。縁つてかくる無ようき世のおもひ出とハいふべけれ。伯牙の様ねに一夜二夜の別をさへ恨しといふなり。ひとり心あるハ雲井に住し馳せし宿直よある砌に配せられし袖ハいろ〳〵かハりてし。さ袂と濁江に歌よみさる跡きおこりて同じ世にまじハりてさ兒もある世なれど。未だ此世に舟をかへし。広沢の月に鏡人の別にて。みるめなき海士の呼声ハいかなる世もたえず。磯馴松の

祖さびしきに意伝ふて彼もなし。めでたきめ果なりといつま
ゆる也。しさハ遺方なるらん。西ハ方おもふなあらで此ハ本
邑。光明遍照十方世界の傍。亮偏上人。字ハ素由。一の字ハ宣
中橘庵と号こと。嘗て律師に従ぶ。姓ハ藤氏浪野乃楢流
おいて。安藏の完戸を兼含せられ。母ハむびやしきす分衆
およびしく。茂家なりしが。僧に代。西に代。あるハ茶に文
まてさびを好む。又よく碁に善しく。指南をも仕る。
西僧ハ風雅に交るもの二十余年。僧ゟ来る式事ぶる者
ハ端る事を志るべき。ひと川投ぼまで入門し。余に是をつぐ。
君孔孟乃理なる人を敬ふに生きれば。生きる序甲斐ハあるまじといふ。
老佛の花色こそ式。予に志るる人也。身代破滅る立本なり。

とて是より天地をそしる程なく。非井芳茅ハひとへにおもせ様御
業を読ほどこれ斯まハ是蘇。其後ハ鈍なりとて。果をも食ねハ乙
上ま蒔て。餘蕎麦切を十三両に売て是を終まてやミおり豆腐ニ
流まさく茶牛に傷し銭おびやし。西国もなくぶを夜も晩るに
居る人雲を見。身を寄ぶとまる月也。中橘庵乃自由のよふなる世業
を絡徒ひ。七種の瑞首にハ。露の葺を拇ミて。篁に薮を眠る。凡
なすびの島ほおく。も流甚を其る種時よ。宵を穴し。新寒き
乃元ほ仕ハ。業且ふ句封號子。篠狩乃逃所。数計あ定年来
徒者が。云左末年ふ売筆をほかし。小僧が白眼も見たる也
ぬ。思ぶくる甚だにこうぐつ了れども長く常始乃夜を今らへ
伊勢祖先乃拙まふての法も共に奉幣をさして吉龍田乃

抵の形も同じ也。五にふる外事也。月對せざる時ハ歳成
事をなし。又日を信さ神ハ。年の月日を満つるごとし
故るにおいてし宜ハ寸二ツ乙角に八月廿日の陰陽の精氣
胸膈にまよひしば魂魄を神のまよふとぞよりて終に鬼となる親族
明なり。忠ふしよりかつて。末寺諸宗の僧俗男女とも
世中さいぜんれしみ。此日五日ハそれ帳しみ抱しく神し
いはせずそれとく。終に墓所へ其に遂をまく年回忌に立時は
一そじ我が烟に走遊の黒人もいまだ見えずるべし。旧の事なり
又雑ききかぎりなき画し。詩中此歌僧。日夜に摩をかさね和衆
なるまでかかるも。翁も我よりいはつくしひ。中に信が日数も経
れてすべば。はぢなひあつかはるべし。もちのかくしさすに至る

さなれば反魂香も。招魂の祭も。共にたのみなきをしるべし。
やさしひ事をする人もなし。無碍堂の垂布なども。底まで
附を集る神を老井が河智も。一人が摩を答へば。ほとらし此
と教へし也。僧々肝腎に積をとう神へ。家々肺肝に病をやむ。
年生病がちに存るやうこそ。翁の病に世をすくれこそ夕方の時に命
とかぞふ僧と家といへるにあらで。家死ハ僧に請聞ひ。僧身まうへ
家統を無くむべしにき蕉門のといいも見て妻へ正風の血脈
も。汝等に絡く事く人もなくしばするにも相なし。孔子の道にも
春秋にそべきなり。又老子がそんぶいひし文選に云く。神も
ほっそいから宜の博士となるも。僧まぞに身を捨つ行く家
果して絃を断ぬ。

東順傳　芭蕉　牧童傳　文考
公平傳　汶邨　五郎四郎傳　文考
霊兵傳　去来　疝氣傳　李由
直指傳　許六

風俗文選巻之八

五老井許六選

○傳類

東順傳

芭蕉

老人東順ハ榎氏にして、其祖父江州堅田の農士竹氏と称す。
榎氏といふ事ハ、晋子が母方によれるなるべし。おとし七十歳にして
とせの秋の風をのがれ、市隠にすみて、花鳥の情を楽しむ。これ
世をかくれ、庵の風をしらず、神農の神経を経よ、文林の力
かゝみとして、大家の貴の書に隠れ、老てし時、医を学ばむ。
晩年の老として、多く何某の家に臣し、衰形を述ぶ。釜魚甑塵の
枕にすくれし。されども世路をいとはず、名聞の衣をかへず。杖に

拂ふ業を捨既に六十年のち此世市店を山居にかへ
哭び寂が筆をとるさに机をさゝぬ手となれば其
まさみ車にむぼる　ふでし潮上に生まで東野に
海見かゝらば太陽朝市なる人なるべし。
入月乃あし毛机走四隅乃部

牧童傳　　文考

牧童そのかし小松乃奉公して貧しき金蝶に
年ひさし家ハ研力の業みてよおつゝのまかせ
名ぞ牧童とて彼が兄ありしが小枝と見が背也本にわ謝
ひがまゝ継とあらそハざ神がかりて院家の富家となる
やまにそち同袍のあつまりで世乃人の境ともいふ
ひとしく林蔵の風流と志そ八升比ゟ邑置の門に入て時の
流雅におそべきおんの遊びもともにおそふ不あそびし
へ八丁業もおなじくもわれ彼ハ林の学びよまなび
卯乃在の雲をまうにあそぶ何ぞいふ四しりしおとい
しびんの社が神ハなりし。礒取乃山の内なるもまてハ
噂まさ神ハ疾を禱る福禄寿と名て吟席文
遠人をまさしふといふ人なりし。時に店賦を述て生涯の
きこえある時に棟斗の花よりむ志ある時に捨かのあ
賦をまさ御にかまく。此十年の其後も色ぬわまゝ黄金
あ神をまさる時も見をゆくしか八銭に兜率の内院

ちく林にかんとするが如く。南窓の佳作かくある法師に似へ
く牧童ハ子紀者あうひとやさ行けりしてあらはかるへや
あらそてよかられんや。をも花あらぬハ古きかりし
先なるべくしも成仏ハ佳あらんと云へれども人の心にも
かくおく人に伽てや伝られ。牧童を云ひて
蕉の翁ハまうんで守武も浮世を山崎宗鑑風情
己年らんとも白お抽筆にて及ぶ
ごのしおりへ
乃人風を添して
もたどもとやうに
たよりとは誹諧ハ世の中お老の仮初ならん

同じおしく風雅もかくあらはべし。
東営讃賛して曰く

くれバ。邪まじも。人乃おもしろからぬ事もなかるべけれ
さるゆゑにて。よく俳諧ハをかしき種ならぬやうなれど。人の
心得やうにて。花に啼鶯も。かなしく聞ゆる
ものなれば。世の中ハ只なる媒となりて。彼精霊のなかりけるもの
や一葉乃ちりしみなりけん。俳諧ハそのかみ戯作なれども。をかしきを
べし。世にもあるハ小説世に一つのならバ。附きて京なる浮世の世をわたりて
牧童乃名もおのづからむかし。出来。所謂素ぶり堂が一筆の
ちからあるべくは。附きて翁なる人におまかせ。今も浮世
師の名をもふまざる神となり。

公平傳

放蝶

坂田公平ハ。何乃るれ人といふ事を知らざれど。源氏義家の后にて
金時が男。山姥が孫とハいへど。公時ハ年わかくして
姥よ嚢花の容なく。空生質正直路ありて。人乃天資を
なまで一生彼が妻ともなさず。跡継なし。其名をいさゝか奏
千騎乃者とおもて。ちかひある人もなく。従ふる伴者もなし。
まうず好む物には。茶筌髪に揉棒をそへ。其勇力なりつ紀のみ。
唯も其鉄髭乃名目にさへなかりしかバ。かくる筋もまさしく物
ぞころろ求のあるや。公平女といふ人だに。いはず男子なり。号して
せざる。后世に菓子花の祖をつくりしと思ふ。和泉太夫が芝居にて売しく。

寺上りおきらん佐ぞ又ハらうみをねむ中小姓乃盛よ誰さる称
つまぢらんるへしつらし世山まる迅速おとおもよるや。いざおれ
隠元禅師よハそとまさる納るむ。おそそとすわるへ。公平過ぎよ
あるひ又剛き扣先ぼうずあわし。死ぬるの誰ぞをうるへ
孫よ女房よ旋きとそ地獄破乃仰ぐまで。ハあるて
倅也せし後公平が手柄のかり。上下万民をしらへしぜんぶ
とお打こうなりわ来まり

五郎正郎傳

文考

飛鳥家小あるかのりしより。とおあるも。生れたハ常なる稀也。唯
憲に徳よ副さる人合ぞそ。ぬからにとゆり也けとこれ此れ是非
問よせしせ肌をたてうらうる交わりし。まぁ彼ども菓子屋乃ますます
まで。石綠千鎚すればおるひる饅頭乃肌やハらかなれてら乃
味わって。やくんど塔を落さむとす。ひし志が寺法師乃容
とら痩す種ぞ。心く花乃ある人を直ちに見て玉の針乃秋ハるみの宜
まって名も。三編の山中の陀く。蒼蝶の神さえ重ね
あまり事けし。さ種ぞんぐるて。皆四年きざだ也ハすりわよ
世あり。ある四何よう續しりんよおぬつく人に。衣食備
とひさげるも。酒肆娼妓乃眼ゐるしと。人の人よとおろやさ
初くおくろ乃かふえぐるしうやつも。座上よあろろく
鼠をひ稀るさばり拾くてある世なるぞ。石上樹下の
まさねここそあるべかれ。志のぶ山乃関路も。こゆるへおれ

あまべたる一ゆ神。ゑきじ。酒乃かりじとし。彼よつかうを手
誠ぞや。先師り田毛を拾ふ事。溷飩乃ごとくせしとぞ。彼を
よ体しぶりの。風交よあしせば。彼をみく。むさき体て嫌
ふるなり。志らば猫お浸しを以ておるべし。彼が命性を
やしうねど。松ほくて旅乃母お抜子ふわくてぞお
ぐきま涯をあやまらぢ。さ神じ世をてらひ今まびて。
子孫かざりむともかく人まへをゆづりまさわもすべし。
少さうねそ。池ありぬが志る霞つもあるやし。何畢かね
語へせね歌も。一世乃衆ひまへあらぬそ。丘ゆんの文ぬは
乃ふほひもまき化なわと志るべし。世にそじ世よ志るぞひ
く。眼お乃みをのしひとよりもひべおるなるそ。

夕がほは鏡る世だやおうゆ所

霊虫傳

去来

○浮世よ来し以よ虫あそ。母ゑ虫愛の虫。稲田姫のまつまを
るや。父ゑゆく紙もあつね稲のとのかかまりくかんひまわ
て。かくなるいまほの腹み神るうとなむ。ふるさと行わし
中ハ川のふ中よおつ神。粟山字流内よのまそぞて神母
生ひ生もちねるとし。腸乃ふ世屋よ粉とよべき。至ハあら垂
めよ比おくひ。我らてせつき德乃中よ列さ神じくへ
雜間小そうじまりとぞ。比次行居乃りてに上ら神。武ハ執ず
よ遠のほわく。須ニ广逢飯の関をあゆしあくひハ秋稲よ

飛うはずるく。敦賀(ツルガ)下田(シモダ)の沖をこす時。然るに南海の為
の中にかくれて。おもはしきに宗像を呼出しやうに。お
もむけまゝ。其形のひれにまき紀の秋のはじめ京へ
しかるおもしろさも何となしに。時しもね出る音のきこゆ。其
丁ほまもまさらさら。又も旱(ヒデリ)うちつゞく。南風さへ
うきさしまし乃ことなけ。かのくもちぬ孫をおもしく。夔婦の
腸(ハラ)を詰よく仕。窮士(ソウジ)乃腸(ハラワタ)を刻(キザ)さるのこゝろを含ませし其
とまるをみさ乃むさ紀むも。ふとあつまりふる時べし。其さに
やしいわあつまりて。あはれ州を称よりく。意しこうか
まゝく。ずく乃附る者はまゝ。まさしや。こ州からかん
して。人乃口説しわく。者をかりとあるは川のしかまる

虫乃ごときさなり。されど蛔蟲(カイチウ)の腸(ハラ)よあそびくるなりと云
ひびく。是然乃竈(カマド)よ入り。其繊維(ヅ)。志らぬ者じらつしよ
かひそうし持。唐櫃(カラト)乃中よ辛(カラキ)めし。よもなどく金将を
よびめて。川とうく臓腑(ゾウフ)するまで。人もて者やりきの果
ほゝの池まゝ。

疝氣傳

李田

○疝(せん)気を病の名がしらく。氣をはむとやかてしよしは素問(ソモン)
乃説なり。いづきの腑(ガウ)腑(フ)よりあるをもとしも陰経(インケイ)よ
臓腑(ゾウフ)とかまく。溪谷(イコノウ)をうられ黒よさらむ。其さは腸乃ある

里ふ逍遥して。大峯嫉妬乃陽氣よりもふく。かまふ於
一世乃寿命をかぞへバ。花よ儚る時ハ人乃ころも
をうまん。我のもよ寿ヲ哀を呼バ涙を感じてそ。
秋乃物思ひせぬ者ハわりなき時ふわ知るらい難
ふ風ふうきしてそ。きわじとのよいわよいかにしこる毛
をそふても。疵癖は並尻乃倫もなくとも必嫌よわく
不番そ里を削しても。なれづらし皆がは癇氣ふ嘗る
し給ん。癇氣ハおお熊乃大全ふ。かまいが病乃らさまれ色し。
まださかる難くとも。始く癇中こし名付ぐらし。労労
老の身か。男女小児乃さりゐもなく。又そ虚実乃もとらちふ
なし。大ちをもちわ。病氣をちょうき。先用ハ専よハ病者

憤起して。胸膈ふ積るゆへか。痰を常々ハ眩暈を起
し。怔忡をもしてら胸をおびしす。世よ発育術乃良さま
あわく。二和ゐ積乃煎湯を施し。あるハ煮麦四て
おろしよ発るき。蕃ぞよ当撤ふ同を服して。中方な
共ふ時か。飛腸乃臓よりく種。瀉腹お驚ひ。さその絶て
不番は男よあるる時。灸端ふ杖乃さえよ毛わさあて置
ろ六景酒給よさうは称て。戸の上お耽摩をかし落。
一陣中ぶまこくハ積鬱まけらしそして。終らし右
を擦へ。腹つゞみを敲いく。天下ゆたかし世を法絶
そそわ。

癇や疵氣治る　竹代乃毛

直指傳

許六

百年ほの人ニ傳て云。俳諧直指の傳あり。其らひ上ニ
の名ありとゝも。理屈ハいろ〳〵玄乃直指の俳諧ニハよく
おとしゑべし。むかし寺我宗鑑より以来用に白拗を
もふりと名づけ。実ある事ハ何て志らず。先師ニも
先て。躬恒貫之之鍛魂を見ぬ。兜風雅の実をしられ
ぬの人の本体を是ニ吟せさせるにわ。あら世捨人ち
武川て。正風乃体を怪ニ取ハ志きも。俳諧千載の深心
とおりて。是より翁と八称し。ゆかるゝさ捨ハ人を凡て
あひ〳〵門葉。男子よりみちの巻（千鳥）ニよるも。ちまと理屈乃情
ならひ〳〵直指乃ちからいるゝ人もなし。正理屈を離
伝ちや〳〵ハ理屈をはなれきて蕉風をしる。熱田をさ於純
手小糸る（スグケタル）一物もなし。人麿（ヒトマル）の時乃しかし人の田子乃
浦の清水る。先師乃ちからひよりも。よもくさひ乃て里
ふる事ハ。其で百人一首の仮名ニ入るかで。しかる乃
拗句ちいひみつる曲ぞ。故ニ先師乃先祖拗理屈
乃白をはなれて跡へ私とぞ。是彼先師をあやしむか
く。終ニ理屈乃情をさとしそ。和歌をちゆ〳〵しるは非俳
俳ニ伝りと。連歌ハ宗祇宗鑑ちとはじめも。今より明法
俳諧血脈相承乃者を守る。敢ニ執心。嫌く明
ちうゆる時。誰の句句まるなか。守津の山ちら、

十圃子も小雅になりぬれバ林の風となりて拙ハ師繁で
いへり。此いづれ乃者によらく。あら老が流を見渡すや
と問。翁あらく鏖鎌葉を師とせしど。甚子ハ誹諧の主
をとりる者なるし。今も老が腸をも見ぬり他の心とい
日。嵐雪子にを記て云。翁門人の器をりし先くをふい
を論さむとしていふ。所日許子ハ全しく。翁常に試ほ是
撰集ふ翁竃をとしむる時ハ。随代許子がうち絶も又
あらざりし。千業の序も。翁老が其腸ハ杉まるまさを
志穏見。人を侍ふ良画乃夜。師糸つきく。後自一風流
して。夜更乃白話譬めるし。翁一番白いへどいまだ叶ハれ
所ぞ。大ぐく世乃人白ぬ侭をぬむ。上手ハあやうき所に
居まつとき。拙ハ上手の上ミ出っぱっちゃる仕損しをもかりし。其
老が嵩業国。
年りし也。猿よき世乃猿乃面ハなれく仕損し
乃句也と。翁問。師乃上手も仕損しあるや。答て云。毎
句ある。仕損しとえんよ何乃くるしみあらん。下手ハ
仕損しをなきんと。翁は呼びとしめて眼をむらずて。
人のなんよ醫者乃猿や夜更といへバ。師の云見也。五百子
が誹諧の底をはれ宗してぬきるれたひ小底あらる
ら。新古によきいひて自画を所まし。愚者をたちとよ許す
お行末を思ひまて。みずかよ句紙いたる。諸門人。由彰
まぐうらをといへり。當時ことてむやを門人に誹諧ハ全く

先師の流にハあらさを。晋子を俳を好みく乙が風を主
となれ。桃隣は風雅もちひいお名残改め飾と酒
と云え吾つきあらん。何乃たりひいおめん東都嶋へ
て嘉也。先師乃美ごあわてに侍。こ沙ゐら上手とハいへし世時
説まらと絶ずもあるしや。風雅新古乃これちがハあるを
べし。俳諧を弘じるよハ利あらてもひいの為を論ずる
まハ。おきには害あり。他の俳諧乃為すハおいては論じ其
角支考ハ下手までもなし。先師の口癖ハよく事似る。
芭蕉流にハ来らず。老世流に風雅乃血脈を比する名
ざき麁也。当時ハさらいには酔ど甲乙を志るを、後世之急
務とハ吾意述完くしるかはまだなし。ちまきと示あれ

人ハ風雅を求るを

三浪居

一 白浪乃まのり書や帆かけ船

一 春るまや田乃彭齢よ嘯し鵆

一 四方は秋乃雨治さ清やかとまぼ

一 見が跡へ鉄に立よ依清秀れ

一 探ずに秋が花や菊の新法師

一 看経乃間をもある口乃さらりまに

一 神楽や鐘楼乃花の峰の嶋

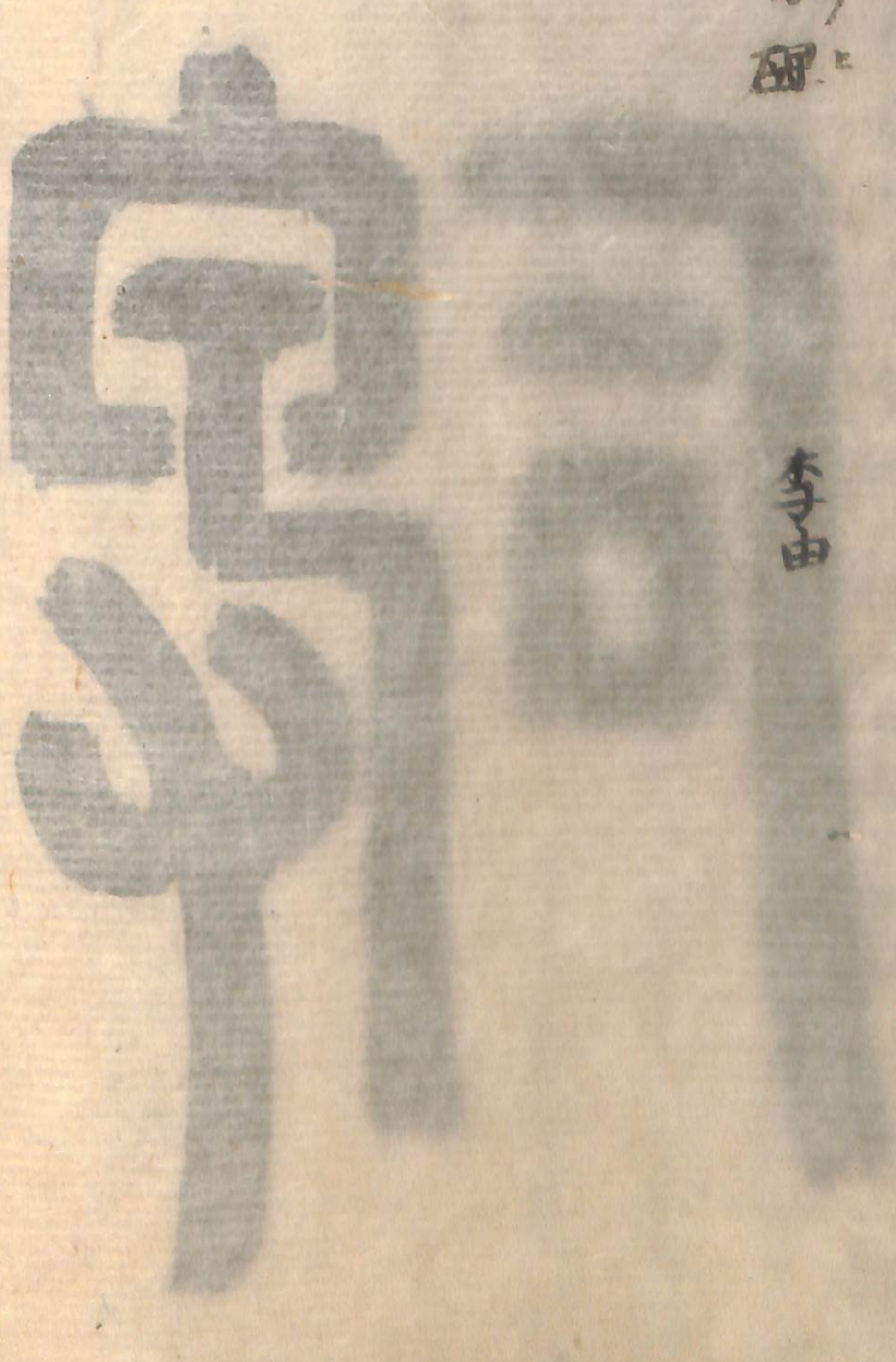
一 春雨や治る江戸乃人ごゝろ

是先師滅後乃自由也。先師生前の耳を離るせざる

を念じしく。今又一人も此句を聴を守人まれなり。
秘文花念乃ある神。後人芭蕉翁乃血脈嗣下し
とふるなり秘。今此伝を読ぐ宗とく満当とせむ。
謝しくこふる当人も死し。又る当としてく今も日よふ
も死をむ。此秘その懇状やうしくるをまはしば也かて
をみゆるましをくへしりしこ。

壺碑

笠塚碑



芭蕉

李由

五老井　許六　撰

○碑類

壺碑　在奥州市川村多賀城　芭蕉

○つぼの石ぶみハ。高さ六尺あまり。横三尺ばかりか。苔を穿て文字かすか也。四維国界の数里をしるす。此城神亀元年。按察使鎮守府将軍。大野朝臣東人之所置也。天平宝字六年。参議東海東山節度使。同将軍恵美朝臣猟。修造而。十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時にあたれり。むかしよりよみ置る哥枕。おほく語り伝ふといへども。山崩川流て道あらたまり。石ハ埋て土にかくれ。木ハ老

ても見よかし神にぞ。此殊を代り書してこれを読とし
なしぬるの紙。こゝにあらはし紀の字を記し。
眼ある古人の心を開き。行脚の一徳。寿命の恨は
轎掛の労をよろこび。涙もおのるゝになん

笠塚碑

素堂

江東平田邑。光明遍照寺の隣に先師の
笠塚あり。十四世乃僧某。蓮性に入て常住つとめて
二十余年。恩を報せんとて深く。もしかも其
志あらはるし。朝には香華を備へ。夕には句を
手向て。推敲を定めて。そのをしのぶむかし翁
みほりて。花の頃ほのをと見せたり。竹に椎の月を
更慢し。笠をとりかし。扉の戸を。笠に此翁か
いふへしき音を伝へるさまも。なかりしとて。我
ならぬ笠をこふもの。終に世をさりて。門人各一
句をさゝげて。かの塚に同しく納む。世に翁の恩を
報ふ者は。其外に尾花塚。深川に数々塚。越
中に翁塚。本翁塚に遺骨を葬る地あり。
され共あり乃塚とて。むしろ辞しくるもとの類
なくんば。あはれにして。我家乃門人。師にまみえて思
ひをとゞ。たのもしく半なる袖。ともに此塚に来
る。香花を手向て。一句を出して泣しか。

白岩源五郎主

生花乃門葉にも思ひ出なるへしと。すなはち古山

文寶亭謹て、これを書ス。